

# News 港湾ニュース

## 留萌港からのトドマツ原木輸出の取組

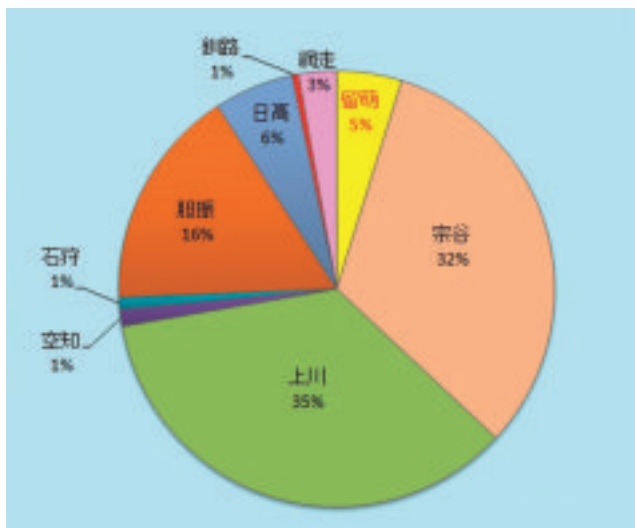
北海道留萌振興局 森林室

### 留萌材の販路拡大の取組

北海道北西部に位置する留萌流域は、土地面積の約81%にあたる約32万haが森林です。人工林資源の4分の3をトドマツが占めており、年間のトドマツ素材生産量は約3万m<sup>3</sup>です。

留萌流域のトドマツ人工林は利用期を迎えており、今後、適切な森林整備を進めることで、木材生産量の増加が見込まれます。しかし、管内の木材加工場は3社と少なく、流域で生産される原木の多くは輸送費をかけて上川や宗谷管内などの工場へ出荷されるため、事業費負担が多く森林所有者が受け取れる丸太の販売収入が減少してしまいます。

事業費コストを抑え少しでも多くの木材販売収入を森林所有者に還元することで、森林所有者が継続的な森林施業に取り組める環境づくりが重要と考えます。



留萌流域産トドマツの消費地（平成24年調べ）

こうした状況を受けて、地域の森林・林業関係団体等で構成されている留萌流域森林・林業活性化協議会（以下、「協議会」）では、平成25年5月に「留萌材の販路拡大のための実行計画」を策定し、留萌産トドマツの販路拡大のために様々な取組を進めています。

その一つとして、日本海側拠点化形成促進港である

留萌港を活用したトドマツ輸出の検討を行っていたところ、平成25年8月に北海道森林組合連合会と商社から留萌産トドマツの輸出の話があり、協議会として連携して進めることになりました。

### トドマツ材輸出の取組

平成25年12月にトドマツ材の品質確認を行うため、サンプル材として25m<sup>3</sup>の留萌産トドマツ間伐材をコンテナが扱える苫小牧港から韓国へ輸出し、挽き立て（製材）結果として、品質に問題のない旨の回答を受け、輸出という新たな販路について事業関係者と情報の共有を図り、地域一丸となって留萌港に韓国向けトドマツ材の搬入が本格的に開始されました。

韓国に輸出するトドマツ材の規格は、材長3.65m、末口径20～30cmの間伐材が主体で、留萌流域のほか、隣接する石狩空知流域からの集荷分を含め約1,850m<sup>3</sup>のトドマツ材が、平成26年6月2日に留萌港から初めて韓国へ輸出されました。



留萌港でのトドマツ材の船積み（平成26年6月）

なお、韓国で使用される原木の材長が北海道内の主要な規格である3.65mとほぼ同じであり、採材に特別な手間が生じないことも韓国輸出へ向けた取組の成果につながったと考えられます。

## ■韓国での木材流通調査

留萌港から輸出したトドマツ材が韓国でどのように製材加工され、使用されているか、また、評価を受けているかを知るため、平成27年2月26～27日に韓国群山市内の製材工場及び建築現場等で調査を実施しました。

調査は、協議会が主体となり、輸出したトドマツ材を挽いた製材工場で、スプルース、ヘムロック、ホワイトウッドなどの原木を年間72,000m<sup>3</sup>消費し、主にデッキ材や垂木<sup>たるき</sup>を生産しています。ここでトドマツは、ロシア産スプルースの代替として木口3cm×3cmなどの垂木を生産し、建築資材を取り扱う代理店に納品したとのことでした。

トドマツの評価としては、納入されたトドマツ原木の中には大きな節を有するものがあり、スプルースより原木利用率が若干低くなるが、軽くて使いやすいとのことでした。



韓国での製材工場視察（平成27年2月）

トドマツが注目されているのは、ロシア材が夏期は原木価格が安くなる反面、冬期間は供給量が不足し原木価格が高くなることから、安定的に原木が供給されるトドマツへの期待が大きいようです。

その後、垂木の主な用途を確認するために建築現場を視察しました。韓国では現在建設されている住宅の9割が集合住宅であり、今回は建築中の高層マンションで、コンクリート天井と住居表面の天井板を吊り下げる部材として使用されているところを確認しました。

## ■今後の留萌港からのトドマツ材輸出について

韓国の森林は育成段階で、平成25年の木材需要量2,800万m<sup>3</sup>のうち輸入材が2,300万m<sup>3</sup>を占め、木材自給率が約17%であることから、木材の多くを輸入に頼らざるを得ない状況とのことです。

韓国では、集合住宅の建設が好調で内装材としての垂木の需要が年間を通して安定しており、製材工場でのトドマツ材の評価も良く、もっと多くのトドマツ材を受け入れたいとのことから、秋から春に輸出することで十分に継続的な需要が見込まれます。

韓国の工場からの継続的な受入要望に対して、より安定的な供給を行うためには、留萌流域のほか、隣接する石狩空知流域北部からの集荷も重要となりますので、近隣地域と輸出の取組に対する情報共有を行い、集荷態勢の強化を図る考えです。

留萌流域には森林資源が十分にあります。また、平成26年度の留萌港からのトドマツ原木輸出は、別の商社による韓国、中国向けを含めると計7船、約15,000m<sup>3</sup>となり、留萌港からの輸出が一つの販路として定着しつつあるといえます。

今後、安定供給態勢を確立し、地域で量を確保できることを示せば、加工施設の新設も期待できます。この輸出を一つの契機として、利用期を迎えた留萌流域のトドマツ人工林資源を有効に活用していき、地域の林業の振興、産業振興につなげていきたいと考えます。

